



# Interview

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

植田一博教授

## 研究は実世界志向

— 世の中で起きている面白い現象のメカニズムを知りたい —

情報学環が設立された2000年からの4年間、学環のメンバーでいらした植田先生が、この春、10周年を迎えた学環に戻っていらっしゃいました。

産声を上げたころの学環のお話や、興味深いご研究について伺いました。



### ■ 2000年当時、新しくできる組織に行くというのはどんなお気持ちでしたか。

どんな組織になるのかよくわからないところへ異動する、というのはちょっとリスクなのかなとも思いましたが、それよりもなんだか面白そうなので「行ってみたいな」という気持ちでした。他部局からの流動の教員がかなりの割合を占めるという仕組みが他の研究科と違うところで、流動教員も組織運営に関わっていきななきゃならないのは結構大変かなと思いましたが、一方、教育・研究という意味では、僕のいた駒場も学際的な研究を標榜する組織でしたから、それほど変わらないのかなという気もしました。実際来てみたら、他の部局の先生と知り合いになれるというメリットがあり、研究をしていく上で、こんな考え方や、こういう手法があるんだということを学ぶことができましたし、実際に一緒に研究を行うために科研・学術創成研究費を獲得したり、研究の面でも、ある意味財政の面でもメリットがありました。当時を振り返ってみると結局そんなにリスクなことではなく、楽しかったですよ。

### ■ 研究のテーマがバラエティー豊かですが、植田研ならではの特徴はありますか。

僕の専門は、科学的に人の認知や社会のいろいろなメカニズムを明らかにしていこうという、認知科学とか認知神経科学と言われていた分野です。うちの研究室では理論志向の研究は少なく、もっと実世界と言うか、現実世界に目が向いているのが特徴です。少し例をお話しましょう。

まず「速読の脳内機序の解明」。速読なんて僕は全然できませんし、どちらかというところの怪しいなと思っていたのですが、ある時、非常にまともな視覚訓練をして読書スピードを上げていく方法がテレビで紹介されていて興味を持ちました。なんでこんなことが可能になるのか、知覚メカニズムとか脳の中のメカニズムを明らかにしたいなと思い、その速読教室にコンタクトを取って共同で実験を始めました。

それから、「行動ファイナンス」ですね。経済学部で習う経済学では、合理的な人間である「経済人」が意思決定をして経済を動かす。でも実際、一般の人間は感情の影響を受けてなかなか合理的には意思決定ができないものです。例えば今1ドル90円で1万ドル買ったとしますね。91円、92円・・・と上がってくれば嬉しいけれど、ある時不況のニュースが飛び込んで87円になったとします。どうされますか？買ったドルを売るかそのまま保持するか迷いますよね。そのあぐく、多くの場合はそのまま保持してしまう。それが普通の人間です。

これがプロのディーラーなどの合理的な経済人なら、87円になる前、89円とかで売ります。普通の人間はそんな冷静な判断はなかなかできません。たいがい身銭を切っていますね。待っていれば元の90円に戻るんじゃないかと思って持っている80円ぐらいになって、耐えきれなくなってそこで売る(笑)。そんなことやっちゃいけないのに、実際の多くの人間はこういう非合理的な意思決定をしてしまいます。ディーラーなどのプロと我々一般の投資家とどう意思決定が違うのか、何を訓練したらプロになれるのか、あるいはプロは89円で売らなきゃいけないときに淡々と売っているのか、それとも本当は嫌々売っているのか。そういうのは行動傾向や生理反応を見るとわかるので、実際のディーラーの方たちに協力いただいて実験をしています。

こんなふうに、世の中で起きている面白い現象の背景に、どういう認知メカニズムや社会構造が働いているのかを見ていきたいと言うのが僕の研究室の基本姿勢です。実生活に有用な示唆とまではいかなくても、世の中の現象を理解する助けにはなると考えています。こんな研究をやっていると、自分でもお金儲けできるんじゃないですかとよく聞かれます。お金はあった方がいいけれど、お金儲けにはあまり興味はありません。それよりも彼らが何をやっているのかを知りたいですね。

### ■ たいへんなグルメだと伺いました。今まで召しあがったものの中で一番美味しかったものを教えてください。

それはなんですかね(笑)。食べ物もワインもそうですけど、何を食べるかよりも、誰と食べるかが大きいと思いますね。その時どんな話をしたかとかね。やっぱり家のご飯は美味しいと思うし、気の合う人と行けば料理がイマイチでもいい思い出だし、すごく偉い人と高いレストランに行っても美味しくないとはいえないですね。

僕が最初に学環にいたころは若い人たちがとても元気でよく一緒に食事に行っていました。上の人たちの悪口を言って(笑)、というのは冗談ですけど、楽しかったですよ。今回来てからまだ2カ月しかたっていないのでよくはわかりませんが、あの頃の方が教員間の距離が近かったのかな…。今はコース制になって、附属センターもできて、組織自体大きくなり、たぶん組織運営はずいぶん効率化されてきたのかなという印象はありますが、その反面、昔のように手弁当で和気あいあいというようにはいなくなったのかもしれないですね。学環の先生はそれぞれの分野で活躍されていて、研究もすっかりやっているし、組織としては成熟してきているのだらうと思いますが、若い人たちの声がかつてのようにもう少し聞こえるといいなというのがこの2カ月学環に在籍してもった感想です。

## 現代韓国研究センター記念シンポジウム

情報学環では、政治、情報、文化をキーワードとした現代韓国研究センターを、韓国国際交流財団による全面的な支援を受けて、2010年度に設立することを決定した。初年度は、「東アジア共同体に向けた日韓パートナーシップ」というテーマの下に、国際シンポジウム、研究会、大学院生ワークショップを開催するなど、東京大学が持つ現代韓国研究のリソースを積極的に利用することで、日韓の知的世界の懸け橋になるとともに、日本における現代韓国研究をリードする役割を果たしていく。また、現代韓国研究の発展に必要なデータベースの構築や資料の収集などにも尽力することで、東京大学、さらには日本における現代韓国研究を発展させるために必要な公共財を提供する役割を担っていく。

6月5日、福武ホールにて、ソウル大学日本学研究所所長韓栄恵（ハンヨンエ）氏、朝日新聞前論説主幹若宮啓文氏を迎え、当センターから木宮正史、真鍋祐子の両名が加わり、姜尚中センター長の司会で、「東アジア共同体に向けた日韓協力」という主題でシンポジウムを開催した。韓栄恵氏からは、ソウル大学日本学研究所での苦労話に



基づいて当センターに対する要望や忠告が送られた。若宮氏からは、他のセンターとは差別化された東大ならではの現代韓国研究センターの役割を果たすよう希望が述べられた。それに対して、木宮氏からは、『対等化』する日



韓関係とその東アジア的含意』という主題で、マクロな日韓関係の構造変容が一方で東アジア共同体に向かう日韓の協力を必要としながらも、他方で日韓の協力をより一層困難にするという条件変化に焦点を当てた説明がなされた。また、真鍋氏からは、がん治療研究に関する日韓中の協力事業に関する説明が行われ、今後の日韓中の協力モデルに関する示唆が与えられた。以上のように、さまざまな角度から、東アジア共同体という枠組みの中で、なぜ日韓協力が必要とされているのかについて議論が行われることで、今後の当センターにとって重要な指針を提供する意義のあるシンポジウムであった。（現代韓国研究センター運営委員 大学院総合文化研究科准教授・木宮正史）

## 『「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座』シンポジウム開催

『「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座』では、平成21年度の研究成果報告として、4月14日に東京大学内「山上会館」において、シンポジウムとレセプションを開催した。

シンポジウムでは、講座の構成員である複数のインフラ関係企業、研究協力機関である国土交通省、総務省、経済産業省、東京都等から約110名が参加する中、講座担当教員の石川雄章特任教授からの研究報告が行われた後、道路管理、情報流通基盤、スマートグリッド、地域活性化等のインフラ高度化に向けた先進的な取り組みを行っている企業の皆様から、事業の内容や今後の方向性が提示された（詳細は [http://www.advanced-infra.org/activity/sympo\\_2010/index.html](http://www.advanced-infra.org/activity/sympo_2010/index.html) にて）。

その後のレセプションでは、社会連携講座の目指す姿である、様々な知識や経験を融合し、新しい価値を生み出す「オープンな価値創造の場」として関係者間の交流を深めた。社会連携講座では、引き続き幅広く情報発信しながら様々な活動を行っていく予定である。（特任教授・石川雄章）



## 先端表現情報学 シンポジウム開催

5月30日、五月祭2日目の日曜日の午後、福武ホールにて標記シンポジウムが先端表現情報学コースにより開催された。写真はそのポスターであり、本コースの河口洋一郎先生が一晩徹夜してつくったものである。シンポジウムには115名と十分な参加者があり、内訳も学部生、大学院生、社会人と多彩であったと思う。13時からのシンポジウムでは、新しく今年から教員として本コースに加わった池上高志、中野公彦、目黒公郎の各先生から「複雑系のサイエンスとアート」、「人とモビリティの関係」、「リスクコミュニケーションツールとしての災害シミュレーション」と題する講演をいただいた。その後、河口洋一郎、池内克史、大島まりの3先生により「先端技術×伝える表現×情報科学」という題の下に本コースでの特色ある研究活動についてお話しいただいた。講演、パネル討論とも時間はかなり詰め込みにして、その分、15時からの展示会での直接の交流に十分な時間を割いた。3つの会議室で行われた展示会の各パネルの前では、教員・大学院生と来訪者との熱心なやり取りが繰り返されていた。なお、個人的には、シンポジウム後に、10名あまりの教員で出かけた韓国料理店での打ち上げが、その料理とお酒とともにとても印象に残っている。来年は、月曜の講義の心配のない土曜にしたいと思った次第である。（教授・相澤清晴）



# Congratulations

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo



## 辻井潤一教授 春の紫綬褒章受章

辻井潤一教授（大学院情報学環・学際情報学府、大学院情報理工学系研究科、理学部情報科学科）が平成22年春の褒章において紫綬褒章を受章されました。

辻井教授は、受賞の対象となった自然言語処理研究において、機械翻訳における先駆的な業績ならびに、深い言語解析や意味に基づくテキストマイニング手法の開発、その生命科学分野の文献への適用などで国際的に高く評価される研究成果を収められています。

教授は京都大学に在職中、機械翻訳の国家プロジェクト(Mu)において中心的な役割を果たされた後、1988年、英国マンチェスター科学技術大学(UMIST)の教授、および、同大学計算言語学センター(CCL)の所長に就任されました。UMIST在職中には、ヨーロッパ連合の機械翻訳プロジェクト(Eurotra)のプログラム言語設計の中心として活躍されるなど、大きな成果を上げておられます。

1995年、東京大学理学部情報科学科教授に就任されてからは、言語学理論に基づく深い言語解析とデータに基づく統計手法との融合、生命科学分野の意味付記コーパス(GENIA)構築とその利用などに顕著な成果を上げてこられました。2005年には、英国国立

テキストマイニングセンター(NaCTeM)の初代所長として招聘され、現在は、東京大学大学院情報学環、情報理工学系研究科の教授であるとともに、同センターの研究ディレクター、および、マンチェスター大学コンピュータ科学科の教授を兼任しておられます。

同センター、および、2006年度からの文部科学省・特別推進研究「高度言語理解のための意味・知識処理の基盤技術に関する研究」において、先生は、言語の構造・意味の処理を中核にした新しいテキストマイニング技術を提唱し、テキスト中の情報と知識とを結び、次世代技術の基盤を確立されつつあります。

今回の受章は、教授の40年の研究生活を通じた、人間の言語と意味・知識との関係を取り扱う計算機技術という難問への取り組みと、世界の研究をリードしてこられた業績が高く評価されたものであるといえます。(大学院情報理工学系研究科 助教・松崎拓也)



## 目黒公郎教授 科学技術分野文部科学大臣表彰

情報学環総合防災情報研究センター(CIDIR)の目黒公郎教授が、平成22年度科学技術分野文部科学大臣表彰(開発部門)を受賞しました。



新宿区内のホテルでの表彰式(4月13日)

目黒教授の指導で博士(工学)を取得した上半文昭氏(鉄道総合技術研究所主任研究員)との共同受賞で、対象は「構造物検査用遠隔非接触振動計測システムの開発」です。

同システムは、レーザドップラ速度計の筐体に高精度な振動計と角度計を内蔵して計測結果を補正するアルゴリズム、大型構造物の現地測定に特化した機器特性と装置構成などの研究によって実現したものです。「従来の検査法に代わる安全で安価、迅速で高精度な定量的構造物検査手法として、社会基盤の維持管理体系の合理化に寄与している」と評価されました。社会基盤施設の老朽化の進展、地震危険度の高まり、少子高齢化や保守コスト削減による熟練検査技術者確保の困難などの環境の中、平時の維持管理の合理化と簡略化の促進、事故や災害時の迅速な検査による早期復旧などに大いに貢献すると期待されます。(CIDIRセンター長・田中 淳)

## Information

### 「アジア・グローバリゼーション・スタディズ」若手研究者育成プログラム ホームページ開設のお知らせ

学際情報学府では、海外、とりわけアジアの諸大学や研究機関等との緊密なネットワークを活用し、学生主体の国際的な教育・研究活動を推進することを目的として、2010年度から「『アジア・グローバリゼーション・スタディズ』若手研究者育成プログラム」を立ち上げました。同プログラムは、日本学術振興会の「若手研究者海外派遣事業・組織的な若手研究者等海外派遣プログラム(通称「大航海プログラム」)」によって財政的に支援されており、その実施にあたっては、大航海プロ

ラムの趣旨に沿うことが期待されています。

本プログラムを通じて、国際共同プロジェクトや個人プロジェクトを実施し、特に後者については年2度の公募を行います。公募に際して必要情報は、すべてホームページに掲載されますので、絶えずチェックしてください。また、その結果得られた成果などについても、逐次アップロードしていきます。(プログラム運営委員会)

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/daikokai/index1.asp>

## 「メディアと知識社会の未来」開催

5月13日、福武ホールにてシンポジウム「メディアと知識社会の未来:アジアを越境する情報社会を考える」が「東京大学における清華ウィーク2010」の一環として開催された。石田英敬学環長と崔保国教授(清華大学新聞と伝播学院副院長)から開会挨拶がなされた後、セッション1「インタラクティブ・メディアと知識の未来」、セッション2「アジアのメディア産業と情報社会」が開催され、東京大学と清華大学から6名の教員・研究員と7名の学生が研究発表を行った。日中それぞれの立場からアジア情報社会のメディア状況についての報告がなされ、大学間での今後の交流を約束するとともに、会議は盛況のうちに幕を閉じた。



## 学府入試説明会報告

6月12日福武ホールにおいて、平成23年度修士課程入試説明会が行われた。学環・学府として10周年を迎えた今年の説明会では、ご来場いただいた方も過去最高の400名弱と大変な盛況であった。毎年ご好評をいただいている鼎談では、大島まり先生の司会のもと、OG・OBの武田安恵さんと寛康明さんから学府での研究生活や、学府の特徴の1つであるコース・研究室を越えた縦・横のつながりの重要性についてなどの思い出話が披露された。学環・学府めぐりではホワイエ、ラーニングスタジオが熱気で包まれて、閉会のホイッスルもなかなか

か届かない盛会ぶりであった。(企画広報委員長・柳原大)



## 制作展エクストラ2010

「東京大学制作展」は、東京大学大学院情報学環・学際情報学府の授業の一環として年2回開催されるメディアアートの展覧会である。東京大学の研究や技術を、メディアアートとして表現することでより多くの方に実際に触れていただき、身近に感じていただくことを目的としている。この度6月10日からの6日間、東京大学本郷キャンパス工学部2号館にて「東京大学制作展エクストラ2010」が開催された。「[ ]ing」をコンセプトに、現在進行形で進む各々の研究の“いま”を、ひとつの展覧会として表現した。会期中は子どもからお年寄りまで1000人を超える多くの方々がお越しになり、東京大学の研究に楽しみながら触れていただいた。(荒川研M1・坂田圭史)



## 「メディア・エクスプリモ『とやまフォト川柳』カルタ大会」

5月23日、富山県唯一のショッピングモール「ファフォーレ」で、「とやまフォト川柳」カルタ大会が開催された。「とやまフォト川柳」は、メディア・エクスプリ

モ(JST、CREST)と地元のチューリップテレビによるメディアリテラシー・プロジェクトである。テレビ、ウェブ、ケータイを活用し、「テレビでは教えてくれない富山県のイメージ」をテーマにフォト川柳(写真+川柳)を募集、313の作品が投稿された。この中から46音分を選んでカルタにし、この日は県民挙げての大カルタ大会となった。フォト川柳大賞には富山県の美味しい水を詠んだ作品が選ばれた(写真)。

<http://tut-mlp.air.rcast.u-tokyo.ac.jp/>  
(水越研D・鳥海希世子)



## 受賞報告

### ●GVJコラムコンテスト優秀賞

須藤研D1趙趙恩が執筆したコラム「謙遜しすぎる憂鬱な日本、もっと明るく前向きになるのが国際競争力」が第一回Global Voices from Japan「外国人の見る日本」コラムコンテストで優秀賞を受賞。5月13日、国際文化会館で表彰式が行われた。このコンテストは共同通信社、経済同友会、47NEWS、財団法人日本国際教育支援協会、およびJAIFSAの後援を得て、GVJ「外国人の見る日本」コラムコンテスト実行委員会が主催するものである。

<http://47news.jp/feature/columncontest/>

### ●電子情報通信学会論文賞

佐藤洋一教授が、論文「視覚的文脈を用いた人物動作のカテゴリー学習」(電子情報通信学会論文誌、Vol. J92-D, No. 8, 2009年8月発行、木谷クリス、岡部孝弘、杉本晃宏との共著)によって、平成21年電子情報通信学会論文賞を

5月22日に受賞した。これは、映像からの人物動作認識に向けた新規アプローチの学術的貢献が評価されたものであり、同教授の電子情報通信学会論文賞の受賞は今回が3度目となる。

### ●MERA学会賞

石川徹准教授が、人間・環境学会(MERA)の2009年度学会賞を受賞し、5月29日に開催された年次総会・大会で授賞式が行われた。同賞は、環境デザインと人間行動に関する優れた研究を顕彰するものであり、石川氏の空間における人間の認知と行動に関する一連の研究が評価された。

### ●野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞

研谷紀夫特任助教が、昨年刊行した『デジタルアーカイブにおける「資料基盤」統合化モデルの研究』などによる学術的貢献が評価され、今年度の「野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞」を受賞した。同書は学際情報学府に提出された博士論文を出版した書籍で、現物資料とデジタル化した資料の相互を連携させながら、文化資源を電子化して公開するモデルを提案した点などが評価された。(6月12日授賞式)

## 11月12日 情報学環10周年記念式典開催!

2000年4月に全学的な見地から立ち上がった大学院情報学環・学際情報学府。「情報知の熱帯雨林」とも呼ばれるこの組織は今年、10周年を迎えた。11月12日(金)の午後から夜にかけて、本郷キャンパス福武ホールにおいて記念式典を開催。長尾真氏(国立国会図書館長)、鷲田清一氏(大阪大学総長)をはじめとする強力な応援団にお越しいただくほか、学環・学府らしいイベントを大学院生や同窓生らも交えて繰り広げる予定。詳細は追ってウェブサイトなどにて。(企画広報委員会)

## Book

### 『現代思想の教科書 ー世界を考える知の地平15章』

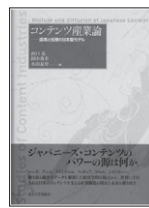
石田英敬 著 / ちくま学芸文庫



20世紀以降の世界がおかれた四つのポスト状況から、現代の知の条件が発生したことを説き、ソーシャル、レヴィ=ストロース、フーコーという巨人たちの思想を読みなおしていく。現代思想における全ての最重要論点を、一から平明に解く15章の徹底講義。

### 『コンテンツ産業論 ー混濁と伝播の日本型モデル』

出口弘、田中秀幸、小山友介 編 / 東京大学出版会



本書では、マンガ、小説、ゲーム、映画、音楽などのコンテンツ産業を対象に、経営・経済学的な視点から再検討し、産業構造の持つ意味や、その振興、制度的支援、文化政策について論じる。日本のコンテンツ産業を特徴づける生産、流通、消費の構造を国際比較もまじえて分析し、日本型コンテンツビジネスに対する新たな視座を示す。

## 編集後記

学内のいろいろなところから先生が集まって研究している学環って、わかりにくくて抽象的な組織かもしれない。一言では名前を与えられない組織。大きな見出しやタイトルもなく、ドアを開けて足を踏み入れてみないとわからない世界。でもなんだか騒がしい。そして楽しそう。そんな学環・学府のイメージを今年のニュースレターには込めています。学環・学府もまもなく10周年。(林香里)

学環学府 30 07.2010

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

編集委員：柳原 大・林 香里・前波奈保子・大久保 遼 mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/